

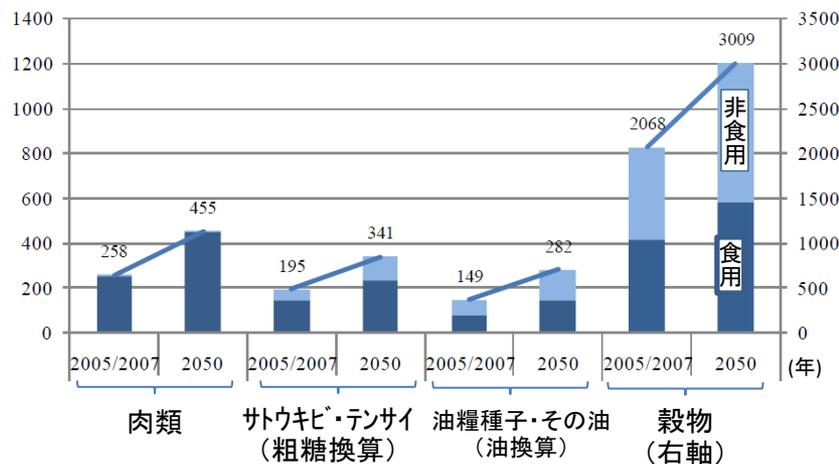
【参考3】 FAO「World Agriculture Towards 2030/2050」(2050年までの世界の食料需給見通し)

FAOは2012年、2006年に公表した食料需給見通しの改訂版を公表。本見通しは、専門家の意見を集約したものであり、概要は以下のとおり。

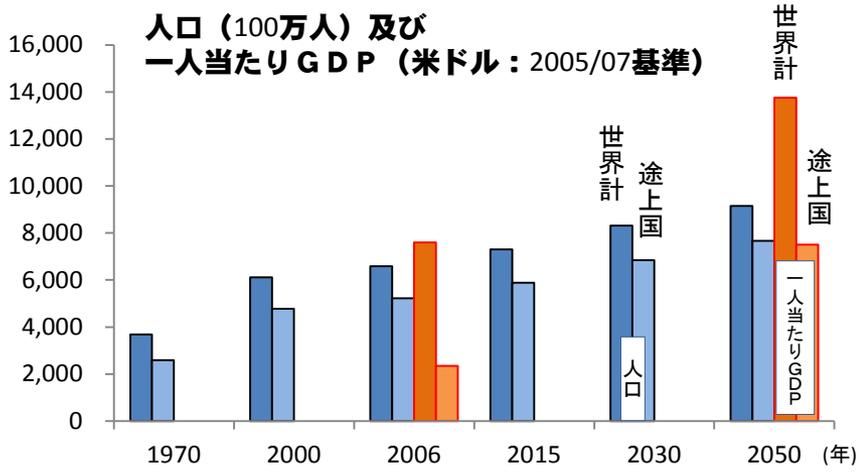
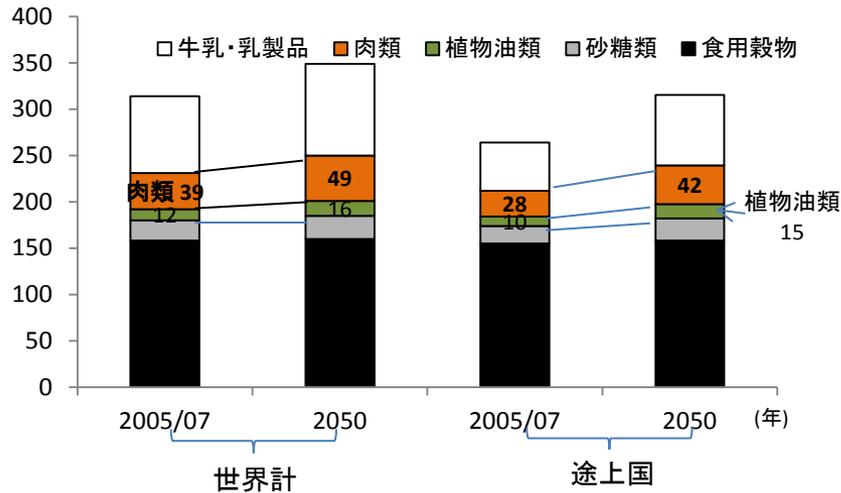
【食料生産量・消費量の増加】2050年と2005～2007年平均を比較すると、世界全体で人口は39%増加し、所得(一人当たりGDP)も45%増加。これに伴い、農産物の生産量(消費量)も増加。

【食料消費の変化】一人1日当たり摂取量(kg)は世界、途上国とも増加し、品目別には肉類、植物油が世界(それぞれ26%、33%増加)、途上国(ともに50%増加)ともに、大きく増加。また、一人1日当たり摂取カロリーを見ると、先進国の増加は4%と緩やかであるものの、途上国は15%増加。

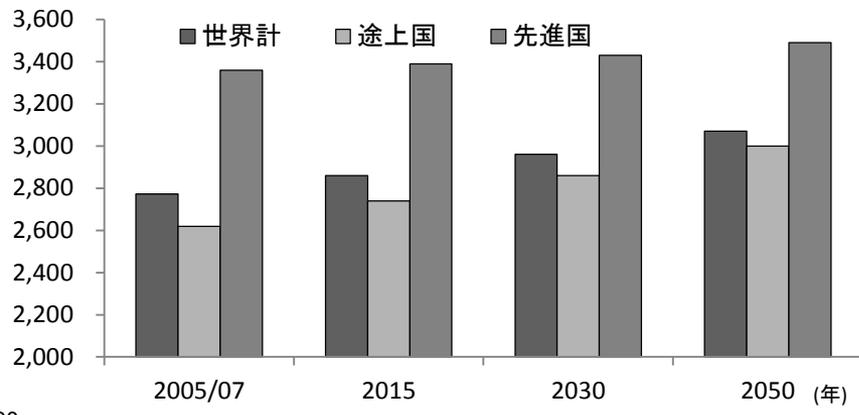
世界の食料生産・消費量 (100万ト)



食料に占める主要品目の変化 (一人1日当たりキログラム)



一人1日当たり食料消費カロリー (kcal)

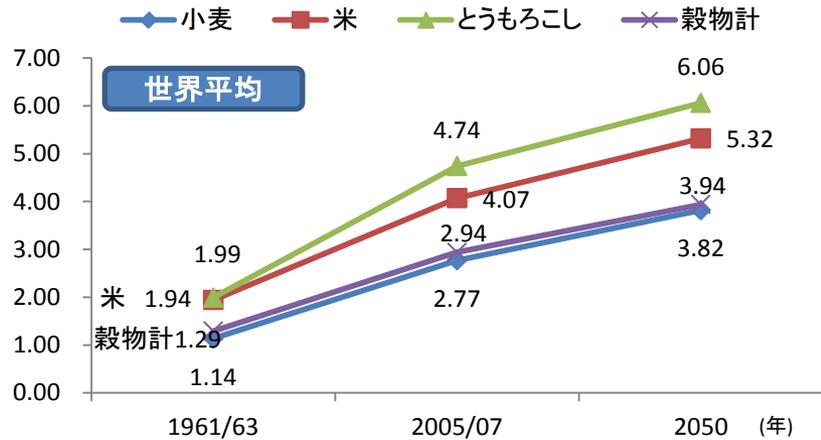


【穀物の単収】2050年と2005～2007年平均を比較すると、世界平均、途上国平均ともに増加(穀物全体では、それぞれ34%、45%増加)するものの、それ以前の期間(1961/63～2005/07年)の増加率(同128%、154%増加)に比べると、緩やか。

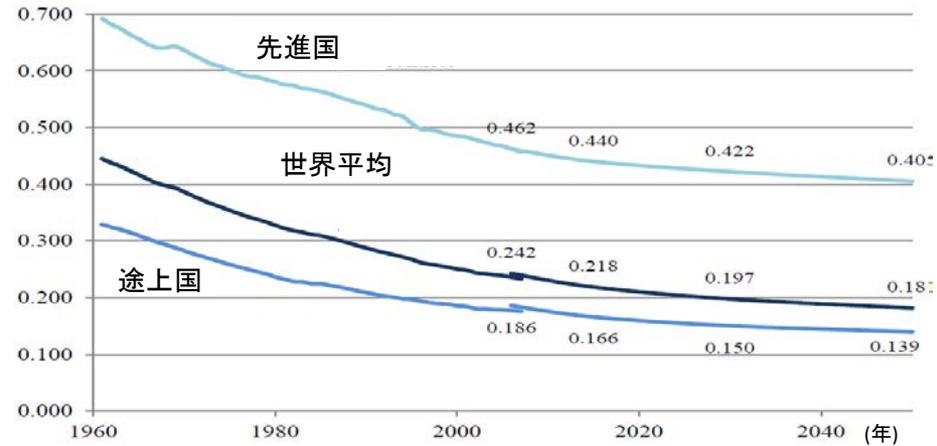
【一人当たり耕地面積】2050年と2005年の一人当たり耕地面積を比べると、世界、途上国ともに25%減少。

【バイオ燃料向け作物の消費】2050年のバイオ燃料用作物(穀物、植物油類、砂糖類、キャッサバ)の消費量は、3億トンと、2005/07年平均の3倍。食料増産が必要となる一方、将来的な生産量や食用農産物の確保も課題。

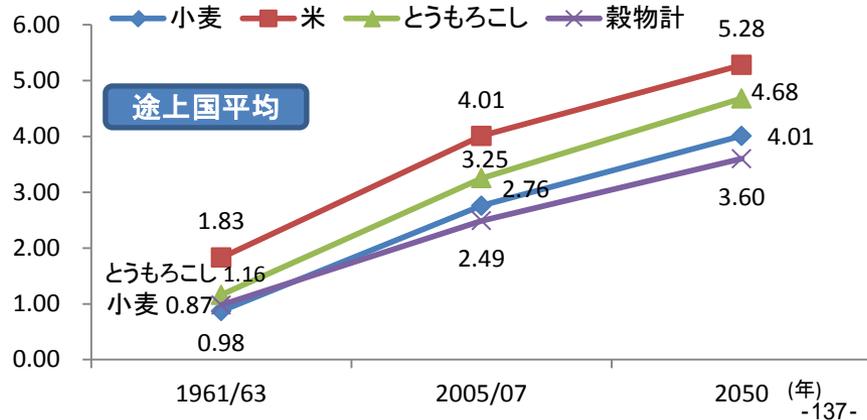
穀物の単収の推移 (トン/ha)



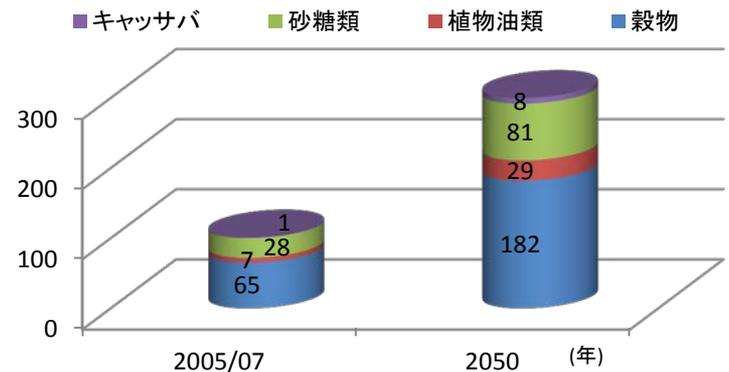
一人当たりの耕地面積 (ヘクタール)



穀物の単収の推移 (トン/ha)



バイオ燃料向けの作物消費量 (100万トン)



【参考 4】

OECD-FAO「Agricultural Outlook 2014-2023」 (農業アウトルック 2014-2023)

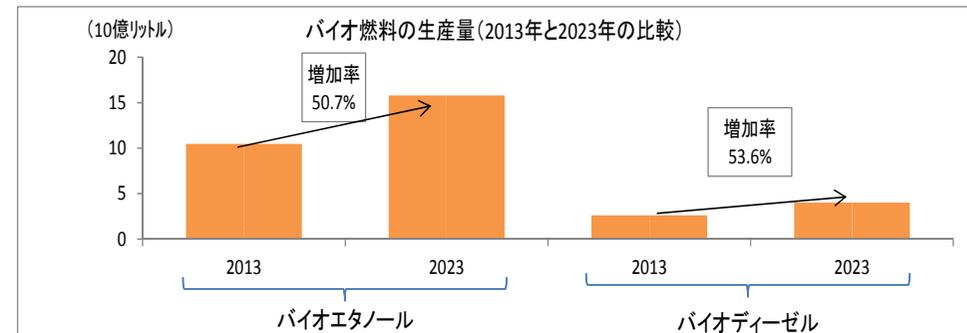
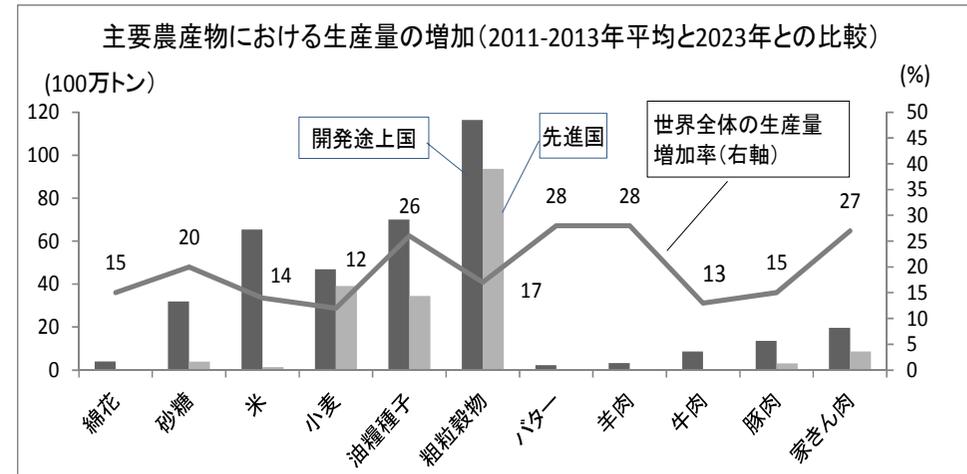
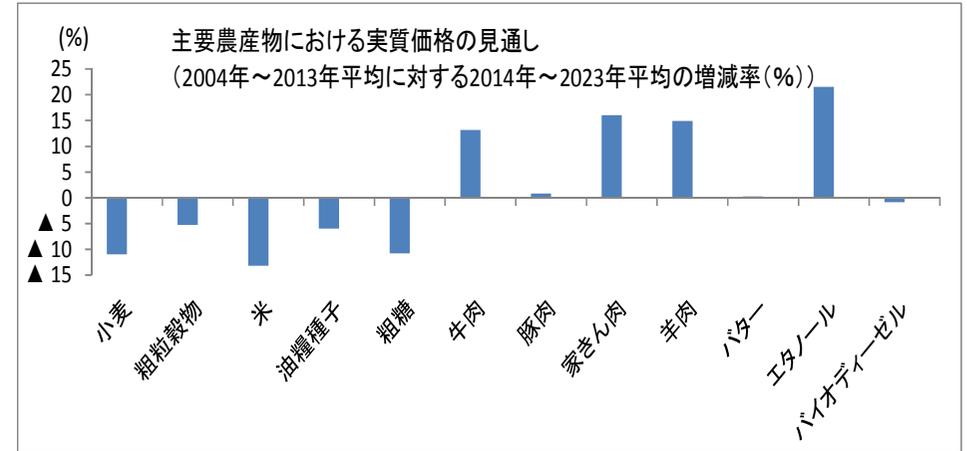
OECDとFAOは2014年7月11日、「Agricultural Outlook 2014-2023」を公表。概要は以下のとおり。

【農産物価格は大幅に低い水準で安定】

農産物価格は、高騰した2008年以前の水準よりは高いものの、最近の最高値水準よりは大幅に低い水準で安定。なお、食肉、乳製品の価格は上昇する。穀物については、期末在庫率が大幅に増加し、価格が不安定になる懸念は緩和される。

【農産物の生産は、主食用から飼料やバイオ燃料等向けへシフト】

今後10年間、畜産物とバイオ燃料の生産量は、作物生産量を上回るペースで増加する見込み。これに伴い、小麦や米等の主食用作物から、食料、飼料、バイオ燃料向け需要を満たす粗粒穀物や油糧種子へ相対的にシフトする。なお、生産量は、生産コスト、農地の拡大、環境問題、政策等による制約が最も少ない地域で増加する。

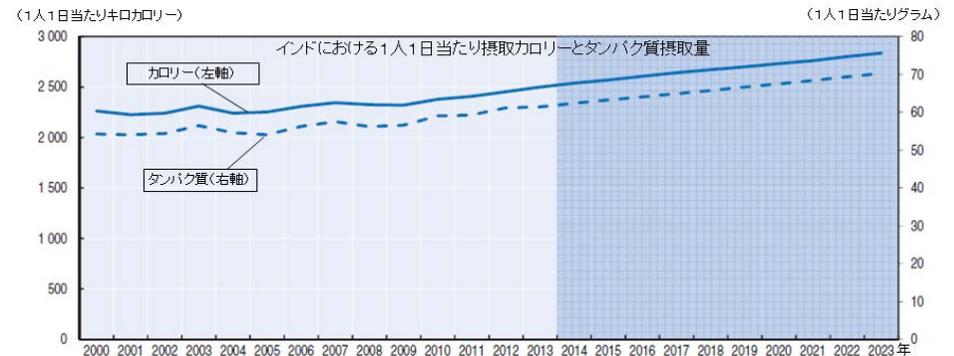
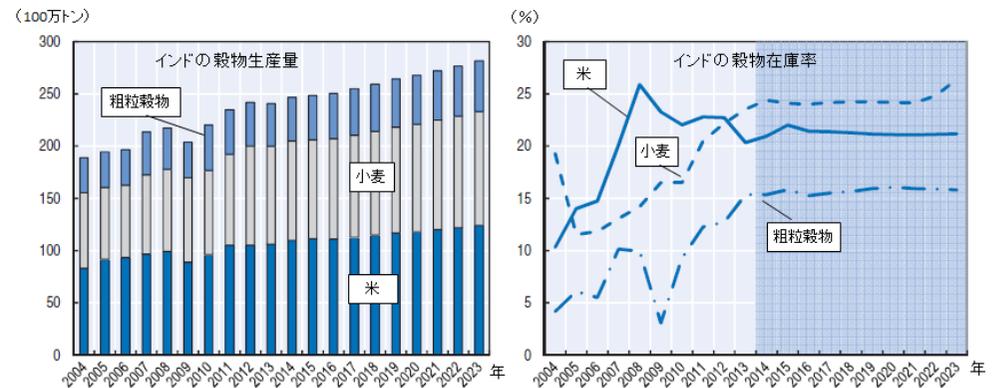
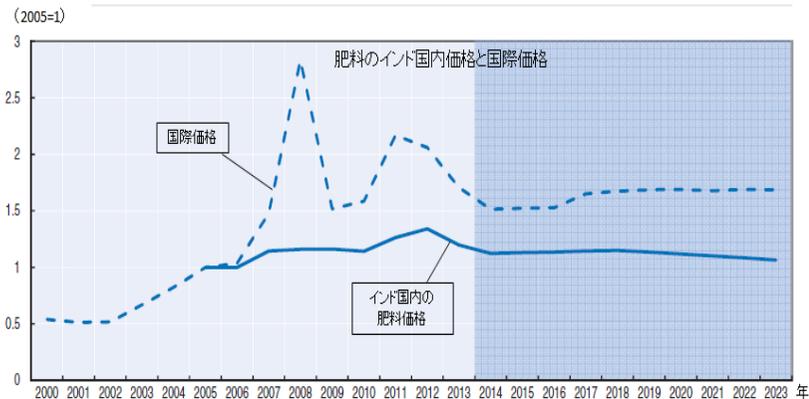
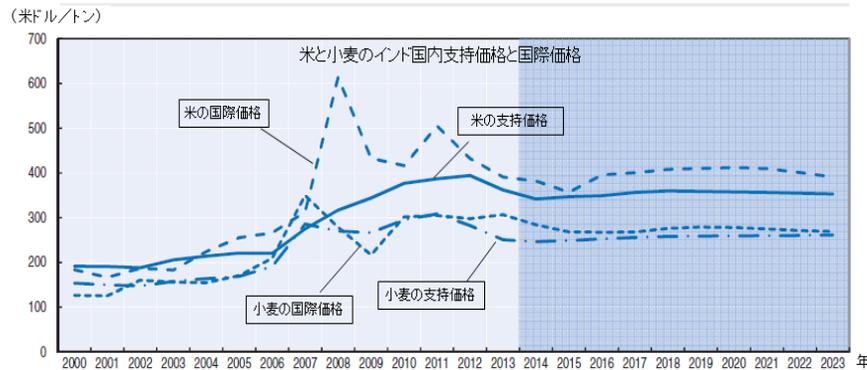


【特集：インド】

本見通しでは、世界第2位の人口を抱え、世界最多の農家を擁するとともに、食料不安を抱える人口も世界最大のインドについて特集。

○農業補助金が農業生産に寄与

肥料、農薬、種子、水、電気、信用取引の利用拡大を奨励する補助金と市場価格支持が、この10年間の農業生産額の伸びに寄与してきた。これらの制度により、今後も生産の伸びが促進され、一人当たりの供給量を拡大することが可能。ただし、資源の制約により生産の伸び率は低下する見込み。



○食生活は多様化

依然、菜食中心ではあるものの、食生活は多様化する。穀物消費量は増加するが、牛乳・乳製品、豆類、果物、野菜の消費が拡大し、食物栄養素の摂取が改善する。ただし、食肉消費量は、大幅に改善するものの、消費量は世界で最も少ないままとする。

○新たな「国家食料安全保障法」の実施が課題

新たな「国家食料安全保障法」は、食料への権利を定めたものとしては、過去最大規模の法律。8億人以上の国民に、補助金の対象となっている穀物を小売価格の1割で配給する。この法律の施行は、インドにとって主要課題。

USDA「Agricultural Projections to 2024」(米国農務省 2024 年中期的な農産物需給予測)

—2015 年 2 月 11 日公表—概要

【とうもろこし】

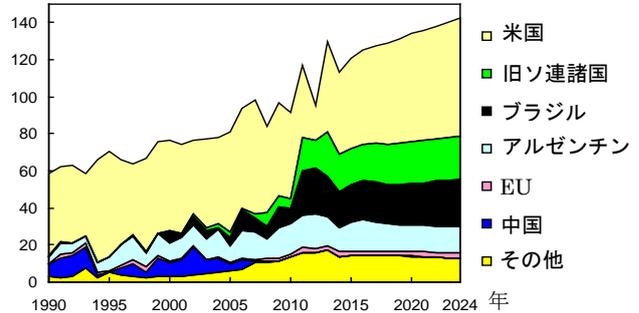
<世界の貿易>

世界における主なとうもろこし輸出国は、米国、ブラジル、旧ソ連諸国。旧ソ連諸国の輸出は、飼料需要の増加に伴い、2024/25 年度までに 21%増加する。これは、ほとんどがウクライナによるもので、恵まれた資源、経済的な開放の進展、ハイブリッド種子の広範な利用、これまで以上の農業投資により生産が刺激され、輸出が競合するブラジル等と同程度増加する。

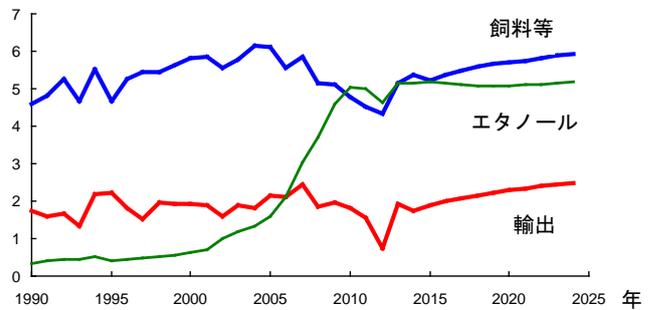
<米国の需要>

エタノール生産への需要は、ガソリン消費量の減少に伴い、横ばい。飼料用は、食肉需要の増加等により増加する。輸出は、干ばつ等の影響で 2011/12 年度、2012/13 年度に大きく減少したため、国際的な市場シェアが低下。このシェアは世界的な飼料需要の増加に伴い回復する。

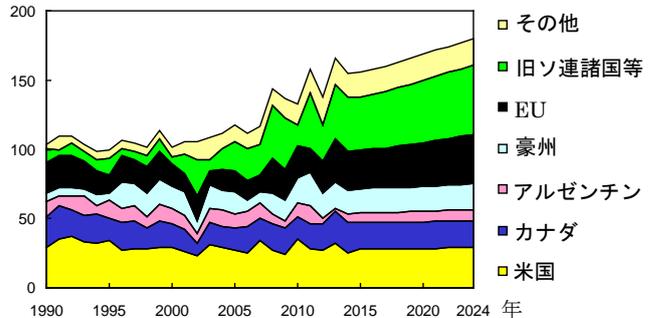
世界のとうもろこし輸出 (100 万ト)



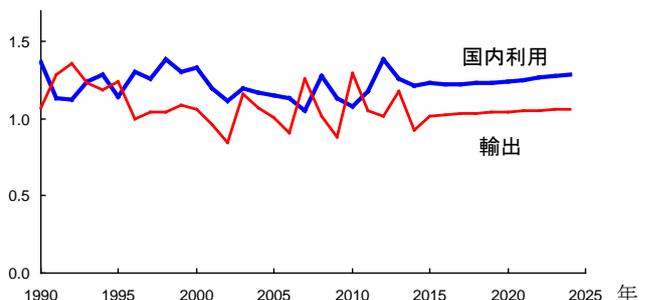
米国のとうもろこし輸出 (10 億ブッシェル)



世界の小麦輸出 (100 万トン)



米国の小麦輸出 (10 億ブッシェル)



【小麦】

<世界の貿易>

開発途上国での所得及び人口の増加に伴い、世界の貿易量は 2024/24 年度には 2015/16 年度に比べ 16%増加。旧ソ連諸国での輸出増加により、世界の 5 大輸出国 (米国、オーストラリア、EU、アルゼンチン、カナダ) の世界シェアは、10 年間の 70%から 62%に低下する。

<米国の輸出>

国内での需要は低迷。作付面積は、1980 年代以降の減少傾向が継続する。世界輸出は、わずかながら増加するものの、旧ソ連諸国、EU 等と競合。世界シェアは 2015/16 年度の 17.8%から、2024/25 年度には 16.1%に低下する。

<世界の輸入>

開発途上国の多くの国において、人口が増加する一方、資源等の制約により国内供給が不足することから、輸入が緩やかに増加。インドネシア、ベトナム等のアジア諸国では、所得の向上により、インスタント麺、ベーカリー製品の需要が増加する。

【大豆】

<世界の需要>

開発途上国における、所得の向上、都市化、食の多様化、人口増加に伴い、食用植物油及び飼料用ミール需要が増加。世界的にも、バイオディーゼル用植物油の需要が増加する。

<世界の輸出>

主要輸出国であるアルゼンチン、ブラジル及び米国は、現在、大豆・大豆ミール・大豆油について世界シェアの85%を占めるが、2024/25年度には更に87%に上昇。ブラジルは、他の大豆輸出国に比べ、栽培面積の拡大、単収向上が進み、大豆・大豆製品の輸出量は、現在の33%から2024/25年には37%に上昇する。

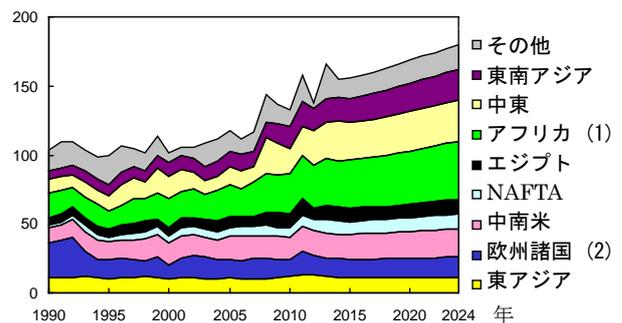
<米国の輸出>

米国の大豆・大豆製品輸出の世界シェアは、現在の31%から、2024/25年度までに26%に低下する。

<世界の輸入>

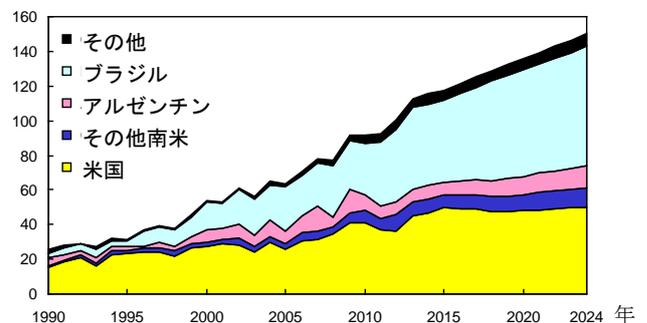
中国は、国内の搾油能力を今後も増強し、輸入により国内の供給不足分を継続的に確保。北アフリカ、中東、東南アジア等においても、飼料需要の増加、搾油用大豆の需要増加に伴い、輸入が増加する。

世界の小麦輸入（100万トン）

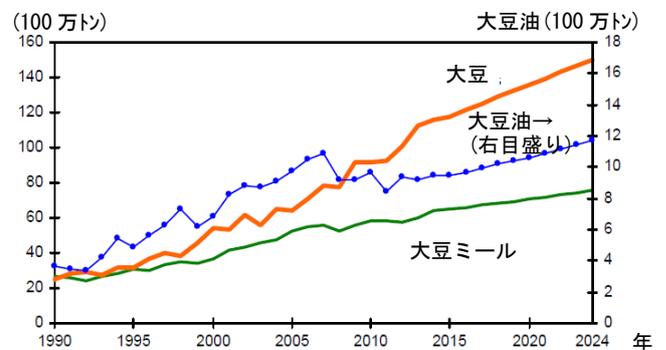


注：(1) エジプトを除く、(2) 旧ソ連域内貿易を含む

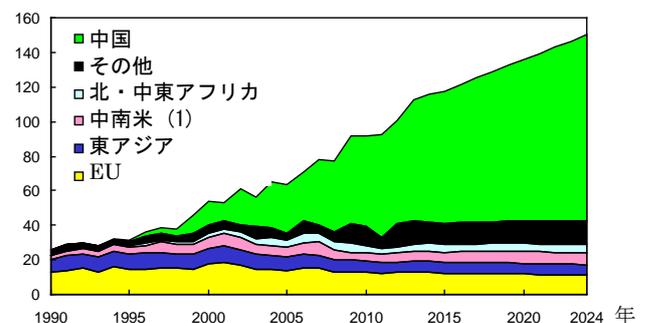
世界の大豆輸出（100万トン）



世界の大豆・大豆油・大豆ミールの輸出（100万トン）



世界の大豆輸入（100万トン）

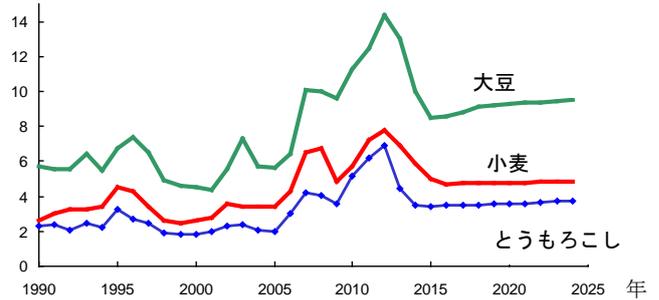


注：(1) メキシコを含む。

【米国の農場価格】

近年の穀物及び油糧種子価格の高騰により、世界の供給量が増加するとともに、とうもろこし、小麦及び大豆価格は低下。世界の人口増加、一人あたり所得の向上、ドル安、世界的なバイオ燃料生産の増加等により価格は穏やかに上昇し、2007年以前の水準に比べ高値で推移する。

米国の農場価格 (米ドル/ブッシェル)



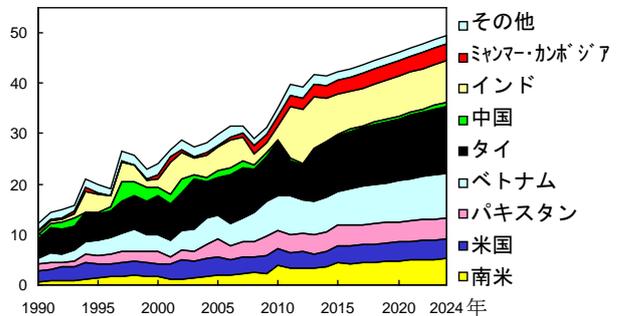
【コメ】

<世界の貿易>

世界の貿易量は、2024/25年度には4,950万トンに(年平均1.8%)増加する。世界の総消費量に占める貿易量の割合は、1990年代が4%、現在が8.6%に対し、2024/25年度までには9.5%となる。主な増加要因は、開発途上国における人口増加及び所得の向上。

輸出量のほとんどをアジア諸国が占める。

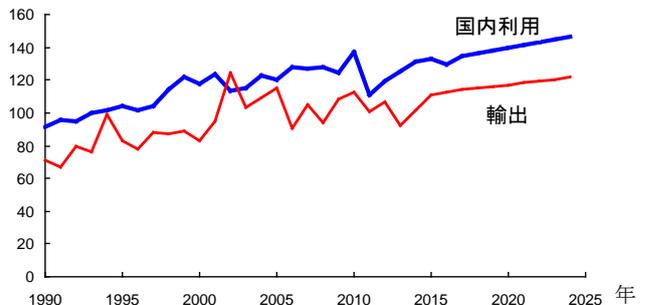
世界のコメ輸出 (100万トン)



<世界の輸出>

タイ、ベトナムは最大の輸出国であり、世界貿易量の約45%を占めるとともに、2015/16年度から2024/25年度における世界貿易の増加量のうち60%を占める。なお、両国における一人当たりコメ消費量は、所得の向上に伴い、食肉消費量の増加等多様化し、両国で減少。インドの輸出量は、輸出規制等の政策及び変動する在庫量により、不安定で推移する。

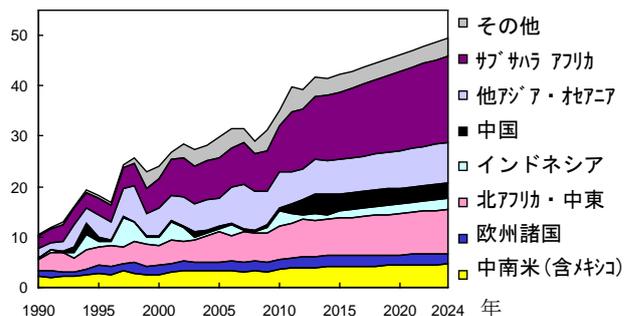
米国のコメ輸出 (億ポンド)



<米国の輸出>

引き続き、中南米への輸出が増加。世界輸出量に占める米国の割合は、約8%で推移する。

世界のコメ輸入 (100万トン)



<世界の輸入>

アフリカ及び中東では、急速な人口増加及び所得向上により、輸入が増加。中国は、一大輸入国であるが、徐々に減少傾向となる。